88288H

2017
地歴最新資料

第 19 号 （2017 年 4 月 25 日現在）

INDEX

2016 年 5 月～ 2017 年 4 月のおもなできごと・ＴＯＰＩＣ！ …… 2

世界史

特集❶ 16 世紀日本とアジアのつながり
—戦国大名と豪商のアジア進出— …… 3
名古屋学院大学国際文化学部教授　鹿毛　敏夫

日本史

特集❷ 「歴史総合」における世界史と日本史のつなげかた
—ペリー来航と日本の開国を事例に— …… 8
京都橘大学文学部准教授　後藤　敦史

特集❸ クラブ活動で生徒に教わった「歴史総合」の可能性 …… 12
鎌倉学園中学・高等学校教諭　風間　洋

地　理

特集❹ 地理的面白さを広めるために …… 17
お茶の水女子大学地理学コース准教授　長谷川　直子

第一学習社

2016年5月～2017年4月のおもなできごと

（注）敬称略。○内の数字は月を示す。

政治	社会・文化	国際情勢
2016年 ⑤26日，第42回主要国首脳会議（伊勢志摩サミット）開幕。 ⑤27日，オバマが現職のアメリカ大統領として初めて被爆地広島を訪問。 ⑥19日，選挙権年齢を18歳以上に引き下げる改正公職選挙法が施行。 ⑦10日，参議院議員選挙で与党が大勝。 ⑧24日，日中韓外相会議開催。 ⑨22日，安倍首相，キューバを初訪問。経済関係強化の方針を決定。 ⑩26日，安倍首相，フィリピンのドゥテルテ大統領と会談し，中国との南シナ海問題を協議。 ⑪8日，日本，パリ協定を正式批准。 ⑪15日，政府は陸上自衛隊の南スーダンPKO任務に「駆けつけ警護」を付与することを閣議決定。 ⑫9日，TPP関連法が参議院で承認，成立。 ⑫15日，カジノ合法化に向けた「統合型リゾート（IR）整備推進法」が成立。 ⑫21日，政府は高速増殖炉「もんじゅ」の廃炉決定。 ⑫27日，安倍首相，ハワイの真珠湾を訪問。 2017年 ②10日，トランプ政権下で初の日米首脳会談開催。 ③10日，政府は南スーダンPKOに派遣の陸上自衛隊施設部隊の撤収を決定。 ③23日，森友学園への国有地払い下げ問題をめぐり，籠池元理事長を証人喚問。	2016年 ⑥16日，少年事件の裁判員裁判で初の死刑確定。 ⑥30日，沖縄県立埋蔵文化財センター，石垣市の白保竿根田原洞穴遺跡で旧石器時代の人骨十数体の発掘を発表。 ⑦17日，国立西洋美術館を含む「ル・コルビュジエの建築作品」が世界文化遺産に登録決定。 ⑦22日，「ポケモンGO」サービス開始，流行に。 ⑧5日，リオデジャネイロ夏季オリンピック開幕。日本は史上最多の41個のメダルを獲得。 ⑧8日，天皇陛下が退位の意向を示唆。 ⑧30日，台風10号が岩手県に上陸。北海道・東北地方で甚大な被害。 ⑩3日，ノーベル生理学・医学賞に東京工業大学の大隅良典栄誉教授が決定。 ⑩8日，阿蘇山が36年ぶりに爆発的噴火。 ⑩20日，レスリングの伊調馨選手が国民栄誉賞を受賞。 ⑪30日，全国18府県の祭礼行事計33件で構成される「山・鉾・屋台行事」がユネスコ無形文化遺産に登録決定。 ⑪30日，理化学研究所が発見した原子番号113の新元素の名称が「ニホニウム」に決定。 ⑫20日，アメリカ軍普天間飛行場の辺野古移設をめぐる訴訟で，沖縄県の敗訴が最高裁で確定。 2017年 ①6日，アメリカ産シェールガス由来LNGを初輸入。 ②22日，NASA，太陽系外で地球と似た7つの惑星の発見を発表。 ③15日，令状なしのGPS捜査に違法判決。 ③24日，小学校「道徳」教科書の検定結果公表。8社24点が合格。	2016年 ⑤20日，台湾，民進党の蔡英文が総統に就任。 ⑥23日，イギリス，EU離脱をめぐる国民投票で離脱派が過半数を獲得。 ⑥26日，パナマ運河の拡張工事完了。 ⑦1日，バングラデシュの首都ダッカでテロ発生。日本人7人を含む20人が犠牲に。 ⑦12日，中国とフィリピンの間での南シナ海領土問題で，ハーグの仲裁裁判所がフィリピンの主張を認める判決。 ⑦13日，イギリス，メイが首相に就任。 ⑧24日，イタリア中部でM6.2の地震が発生。 ⑨9日，北朝鮮，5回目の核実験実施。 ⑩13日，タイのプミポン国王死去。⑫1日，70年ぶりに新国王が即位。 ⑪4日，パリ協定発効。 ⑪25日，キューバのカストロ前国家評議会議長死去。 ⑪30日，コロンビア政府と左翼ゲリラ「コロンビア革命軍」との和平が成立。 2017年 ①1日，国連第9代事務総長にグテーレス元ポルトガル首相が就任。 ①20日，トランプがアメリカ大統領に就任。演説で「アメリカ第一主義」を宣言。 ②13日，金正恩朝鮮労働党委員長の兄，金正男がマレーシアで暗殺される。 ③10日，韓国の憲法裁判所が朴槿恵大統領の罷免決定。31日，逮捕される。 ③27日，国連で「核兵器禁止条約」交渉会議開始。日本は交渉不参加を表明。 ④6日，アメリカ，シリアのアサド政権の化学兵器使用を理由に同空軍基地を空爆。

TOPIC!

世界史　マリア＝テレジア生誕300周年

今年はマリア＝テレジア生誕300周年にあたる。マリア＝テレジアがオーストリアに君臨した時代は，女性の活躍が注目される。オーストリア継承戦争でプロイセンに奪われたシュレジエンの奪還をめざすマリア＝テレジアは，ロシアや宿敵フランスと同盟を結んだが，このときロシアは女帝エリザヴェータが統治し，フランスは国王ルイ15世の寵愛を受けたポンパドゥール夫人が政治や外交に影響力を持っていた。七年戦争ではプロイセンのフリードリヒ2世を窮地に追い込んだが，エリザヴェータの急死を受けてロシアとの同盟が瓦解し，シュレジエン奪還はかなわなかった。

日本史　「木簡・くずし字解読システム－MOJIZO」のスマホ・タブレット版が登場

2017年3月，「木簡・くずし字解読システム－MOJIZO」のスマホ・タブレット版が公開された。奈良文化財研究所と東京大学史料編纂所が共同開発したシステム（PC版は2016年3月に公開）で，調べたい文字の画像をアップロードすると，木簡や文字資料のデータベースから類似する文字が表示される。画像を判別するため，部首や画数などがわからなくても利用できる。最近でも2016年10月，平城宮跡の木簡にペルシャ人の役人とみられる「破斯清道」の文字が書かれていたことも注目されたが，今後このようなシステムが，木簡や文字資料に親しむきっかけとなるかもしれない。

地　理　日本初のシェールガス輸入

2017年1月6日，アメリカ産のシェールガス由来LNG約7万tが新潟県の上越火力発電所に到着した。2016年12月7日にメキシコ湾のサビン・パス基地（ルイジアナ州）からオーク・スピリット号（全長294.9 m，全幅46.44 m）に載せられ，拡張によって通航が可能となり，時間と費用の圧縮が実現したパナマ運河を通って輸入された。アメリカ産LNGは，国際LNG価格の平準化や調達先の多様化によるリスク分散に寄与し，日本のエネルギー安定供給にもつながると期待されている。

パナマ運河の拡張規模（2016年6月末完工）

	旧運河		新運河	
	運河・閘門の大きさ	通行可能な最大船型	運河・閘門の大きさ	通行可能な最大船型
全長	305 m	294.1 m	427 m	366 m
全幅	33.5 m	32.3 m	55 m	49 m
喫水	12.8 m	12.04 m	18.3 m	15.2 m

特集 1

16 世紀日本とアジアのつながり ―戦国大名と豪商のアジア進出―

名古屋学院大学国際文化学部教授　鹿毛　敏夫

1．16 世紀日本認識の変化

世界史と日本史の統合に関する議論と研究が急務である。あらためていうまでもないが，日本は世界区分のなかのアジアに位置する。古代の日本は，アジア世界の一員として，特に隣接する中国や朝鮮半島諸国との関わりのなかで歴史を紡いできた。そのあり方は，続く中世から近世の社会においても，基本的に変わりはないはずである。

近年，従来の歴史認識を大きく変える必要が出てきたのが 16 世紀前後の日本史である。16 世紀の東アジアは，それまでの明朝を中心とした朝貢・海禁体制が弛緩し，中国に求心・一元化してきた国際秩序が動揺する時期である。15 世紀末以降，中国東南部では，自立性の高い小農民が成長して集約的農業に基づく市場経済が発達し，また，福建や広東等の沿海地域では，禁止されているはずの外国船との貿易（互市）が中国人海商によって活発に行われるようになった。日本においても，15 世紀後半から続く戦国時代の動乱のなかで，京都の室町幕府はその求心力を失い，代わって西日本の戦国大名や倭寇的勢力が中国人海商と結んで東シナ海域での私貿易（明朝の立場から見ると密貿易）に乗り出していった。

一方，多くの港市国家が成立していた東南アジア島嶼部では，新たにこの海域に進出してきたポルトガルが 1511 年にマラッカ王国を占領して南シナ海貿易に参入し，さらに海域を北上して中国のマカオに到達した。明朝から居留権を獲得したポルトガルは，16 世紀後半以降，このマカオを拠点として対日貿易を推進していくこととなる。

このように，明朝を宗主国とあおぐ勘合貿易に象徴される従来の国家間の合法的な通交に代わって，16 世紀後半の東アジアでは，さまざまな国と立場の交易集団が錯綜的に交流するようになり，やがてそうした人々の活動が東アジアの交易システムの主流の位置を占めるようになる。そして，この東アジアにおける時代の大きなうねりのなかで，日本では戦国大名が一国史の枠内部の「天下統一」にとどまらず対外的に活動し，また，東アジア交流の活発な都市や港町を拠点とする豪商（貿易商人）が急激に成長したのである。

2．戦国大名の海洋領主性と中国外交

明応の政変（1493 年）によって室町幕府の将軍権力が義稙（よしたね）系と義澄―義晴系に分かれたことを契機として，分裂した将軍権力は日明貿易に必要な勘合を西日本の大名に頒布し，その求心力の確保に奔走した。この勘合の物権化は，当該日本外交の性質を変化させることとなり，以後の日明関係は，幕府外交から大名外交へと変質していった。

この時代の遣明船派遣主体としては，細川氏と大内氏が有名であるが，特に両氏が朝貢の入関手続きの先後を争奪して起こした寧波の乱（1523 年）を経て，以後の遣明船経営権は大内氏に認められることになり，その後，天文 7（1538）年と同 16（1547）年出発の遣明船は，有効勘合を集約した大内義隆による独占派遣となった。

しかしながら，実態はそれだけではなかった。大内義隆が家臣の陶晴賢（すえはるかた）によって自刃に追い込まれたのは天文 20（1551）年 9 月のことであるが，例えば，その 2 年半後の天文 23（1554）年 3 月に，肥後の大名相良（さがら）晴広は，大名船「市木丸」を艤装して明に派遣している。また，弘治年間（1555 ～ 58 年）には，倭寇禁圧の宣諭使として来日した鄭舜功（ていしゅんこう）の帰国に随行して，豊後の大名大友氏が使僧の清授（せいじゅ）を派遣し明に入貢している。さらに，同じ宣諭使として来日した蔣洲（しょうしゅう）の帰国に際しては，義隆没後に大友家から養子として入った大内義長とその兄の大友義鎮（よししげ）（宗麟（そうりん））が，連合遣明船を派遣した。この時，大内義長は倭寇被虜の中国人を送還するとともに入貢し，大友義鎮は徳陽と善妙を派遣しているが，特に善妙が乗った遣明船は明側から「巨舟」と称され，弘治 3（1557）年に寧波沖の舟山島の港町岑港（しんこう）に入港したことが確認できる。16 世紀の相良氏や大内氏，大友氏等の日本列島のなかで中国大陸に近い九州・西日本に領国を有する有力戦国大名は，自ら経営する船を，国内の沿岸海域を越え，東シナ海の遠洋を横断して中国へ派遣する技術と能力，そして財力を保有する海洋領主としての側面を有していたことが，注目に値する。

3．戦国大名の東南アジア外交

一方，16 世紀なかば以降，戦国大名の対外活動はアジアの広範囲に及ぶようになる。大友氏はポルトガルのインド総督への使者をゴアへ派遣し，また，松浦（まつら）氏はアユタヤ国王へ書簡と武具を贈答した。カンボジア国王との間では，1570 年代に大友氏がその外交関係の締結に成功したが，九州を二分する軍事衝突（豊薩合戦）以降は，軍事的優位に立った島津氏がその通交を遮断し，自らがカンボジアとの善隣外交関係を構築しようとしたのである。

カンボジア外交をめぐる島津氏と大友氏の争いに象徴されるように，彼らは，戦国末期の激化した軍事情勢のなかで，東南アジア諸国との外交関係を他大名に先んじて優位に進めようと画策した。それは，大友氏がカンボジアから導入しようとした「銅銃」のような，戦国の戦いを有利に進めるための軍需物資の調達を目的とした競合であることに間違いないが，それに加えて輸入されようとしていた蜂（はち）

第一学習社

蠟（ろう），ゾウとゾウ使い，鏡匠等の積み荷の存在は，単なる軍事品にとどまらない，より広い意味での異国の技術や産物，人間の流入と受容を意味するものとしても興味深い。そして，16 世紀後半のこうした戦国大名のアジア世界に幅広く目を向けた諸政策は，日本国の枠組みをはるかに超えた彼らの世界認識を物語っている。なお，島津氏の東南アジア交易については，この他に，慶長 4（1599）年から 17 世紀初頭に，島津義弘がルソンやカンボジアとの交易に主体的に関与したことも明らかにされている。

4．アジア性の自覚と歴史研究の相対化

「鉄砲伝来」や「キリスト教伝来」は，決して「伝来」という単一の方向に向いた日本史の受動的出来事なのではなく，16 世紀の日本人がアジアのグローバル社会に向けて主体的に活動していた時代背景のもとで理解するならば，より豊かな歴史認識にたどり着くことであろう。

近代以降の歴史学そして日本社会は，伝統的に自らが有するアジア的性質を自覚的に敬遠してきたとはいえまいか。この，いわば「アジアであってアジアでない」日本像の幻想のなかで，近代以降の日本人は周辺アジア諸国との関わりにぎくしゃくし，相互認識の齟齬に大きな痛みを感じ続けてきた。

現代日本の一般的日本史教科書において，「南蛮貿易」がポルトガル・スペインとの貿易としてしか説明されない事態は，その象徴のひとつである。「南蛮」は本来，中国の中華思想に基づく異民族への呼称であり，地理的には東南アジア諸地域を意味する。日朝貿易，日明貿易から南蛮貿易へと続く中世日本の対外関係史の考察対象が，隣接する朝鮮半島・中国の東アジアから一気にヨーロッパに飛んでしまい，本義であるはずの東南アジアを捨象してきた事実は，その史料的制約の問題を差し引いたとしても，近代日本人の脱アジア意識とその裏腹にある西欧文化への憧憬の産物といえよう。

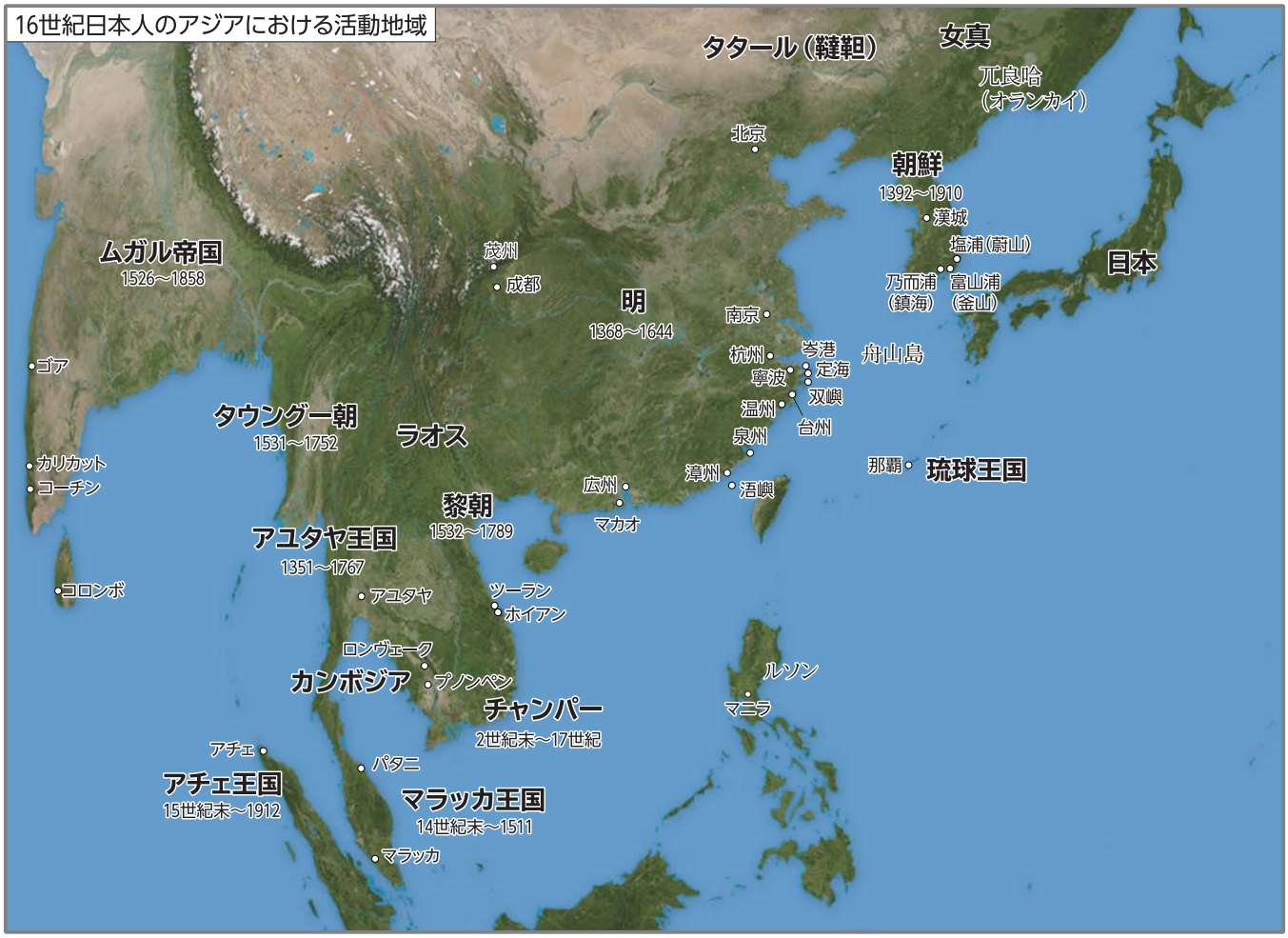
いま見つめ直すべきは，大多数の人間の活動がいまだ地球的規模に広がりえなかった前近代において，日本人の営みは周辺アジア諸国との関係性と，自らに内在する豊かなアジア性の自覚によって維持されていた歴史的真実である。

過去の歴史学は，日本史の研究者が日本語で書かれた古文書ばかりを分析し，中国史の研究者が中国の史料のみで論文を書き，そして，西洋史の研究者が欧文史料に専念して歴史を語ることで，分析結果の不融通性と排他性という大きな苦痛をともなってきた。各専門分野の研究者が，あえて不得意な非専門分野に入り込み，慣れない史料と格闘するなかで，自己の専門分野の研究成果を相対化させることこそ，客観的な歴史科学のあり方といえるだろう。現代国民国家の歴史としての「内向きの日本史」「各国の世界史」ではなく，人間集団間の関係性や相関性をより強く意識した相対的論理思考で，日本史の文脈と世界史の文脈を結び付けていく作業が大切である。

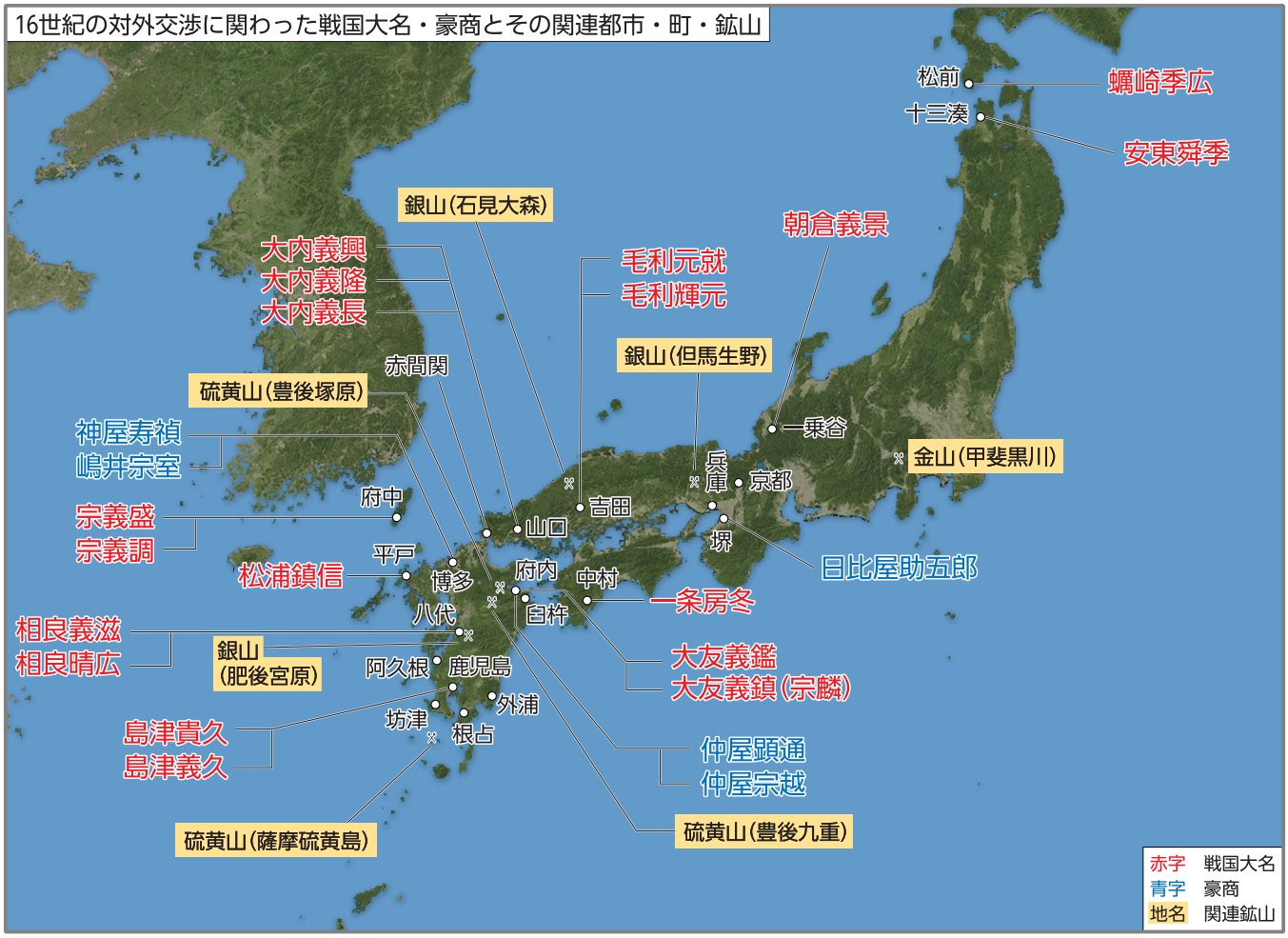
参考文献

- 青森県市浦村編『中世十三湊の世界―よみがえる北の港湾都市―』新人物往来社，2004 年
- 荒木和憲『対馬宗氏の中世史』吉川弘文館，2017 年
- 鹿毛敏夫『アジアのなかの戦国大名―西国の群雄と経営戦略―』吉川弘文館，2015 年
- 鹿毛敏夫『アジアン戦国大名大友氏の研究』吉川弘文館，2011 年
- 鹿毛敏夫『大航海時代のアジアと大友宗麟』海鳥社，2013 年
- 黒嶋敏『琉球王国と戦国大名―島津侵入までの半世紀―』吉川弘文館，2016 年
- 武野要子『西日本人物誌　9　神屋宗湛』西日本新聞社，1998 年
- 中島楽章編『南蛮・紅毛・唐人―16・17 世紀の東アジア海域―』思文閣出版，2013 年
- 橋本雄『ＮＨＫさかのぼり日本史 外交篇７室町“日本国王”と勘合貿易』ＮＨＫ出版，2013 年
- 服部英雄編『史跡で読む日本の歴史　8　アジアの中の日本』吉川弘文館，2010 年
- 羽田正『新しい世界史へ―地球市民のための構想―』岩波書店，2011 年
- 羽田正編『東アジア海域に漕ぎだす　1　海から見た歴史』東京大学出版会，2013 年
- 村井章介『ＮＨＫさかのぼり日本史 外交篇６戦国 富と野望の外交戦略』ＮＨＫ出版，2013 年
- 村井章介『シリーズ日本中世史　4　分裂から天下統一へ』岩波書店，2016 年
- 村井章介『世界史のなかの戦国日本』筑摩書房，2012 年
- 『週刊朝日百科 新発見！日本の歴史 27 戦国大名たちの素顔』朝日新聞出版，2014 年

16世紀日本人のアジアにおける活動地域



16世紀の対外交渉に関わった戦国大名・豪商とその関連都市・町・鉱山



第一学習社

■ 16 世紀に対外交渉を試みた戦国大名と豪商

人　名	対外交渉の具体的内容
蠣崎季広 (1507 ～ 95)	北海道松前の戦国大名。1550 年，対立する西部アイヌの首長ハシタイン，東部アイヌの首長チコモタインと交易協約を結ぶ。
安東舜季 (1514 ～ 53)	出羽の戦国大名。1550 年，長年にわたるアイヌと蠣崎氏の紛争を調停。
朝倉義景 (1533 ～ 73)	越前の戦国大名。1567 年ごろ，琉球への渡航船派遣について島津義久に協力を依頼。
毛利元就 (1497 ～ 1571)	安芸の戦国大名。のち，中国地方全域に勢力を拡大。1562 年 6 月に石見銀山を掌握，翌月に使節を対馬宗氏のもとに派遣して，朝鮮通交の斡旋を依頼。
毛利輝元 (1553 ～ 1625)	元就の孫。のち，豊臣政権の五大老となる。赤間関代官高須氏は，1584 年に来航した中国泉州の商船と交易，翌年の再取引を約束。
一条房冬 (1498 ～ 1541)	公家，土佐の戦国大名。1538 年，本願寺証如や堺商人と結んで「唐船」を建造。
大内義興 (1477 ～ 1529)	周防の守護大名。1508 年，前将軍足利義稙を奉じて上洛，幕政に関与。1511 年の遣明船を派遣し，正徳勘合を獲得。
大内義隆 (1507 ～ 51)	義興の子。周防，長門，豊前，筑前，石見，安芸，備後の守護職を兼ねた西国最大の戦国大名。1538 年と 1547 年の遣明船を独占的に派遣。
大内義長 (1532 ？～ 57)	大友義鎮の弟。陶晴賢に迎えられ 1552 年に大内家家督を継承。1557 年，明使蔣洲の倭寇禁制宣諭に応じて被虜中国人を本国に送還，日本国王印を用いて朝貢する。さらに同年，熙春龍喜を正使として明に派遣。
大友義鑑 (1502 ～ 50)	豊後の戦国大名。1544 年，寿光を正使とした遣明船を派遣。入貢拒絶を受け，六横島の双嶼で密貿易。
大友義鎮 (宗麟) (1530 ～ 87)	義鑑の子。豊後，豊前，筑後，筑前，肥後，肥前の守護職を兼ねた九州最大の戦国大名。 ① 1551 年，府内を訪問したザビエルと会見（第一学習社『ダイアローグ世界史図表』p. 154）。その後，ザビエルのインド渡航にあわせ，ポルトガルのインド総督あての書簡と贈答品を携えた使者 (洗礼名ロウレンソ・ペレイラ) をインドのゴアに派遣。 ② 1556 年，明使鄭舜功の帰国にあわせ，清授を正使として寧波に派遣。清授はその後，四川省茂州の治平寺に移る。 ③ 1557 年，明使蔣洲の倭寇禁制宣諭に応じ，徳陽を正使として派遣。徳陽は舟山島の定海に滞在。さらに同年 10 月，倭寇の頭目王直に同行するかたちで善妙を正使とした巨大遣明船を派遣。船は舟山島の岑港に入るが，明官軍からの攻撃を受けて港内に沈む。使節一行は島内陸部に逃れて新船を建造，翌 1558 年 11 月に島を発ち，福建省の浯嶼に移る。 ④ 1573 年，「南蛮国」カンボジアへ貿易船を派遣。取引ののち，鹿皮，銀，カンボジア国王からの進物と中国商人林存選を乗せて九州南方まで戻るが，大風で避難入港した阿久根で破船。 ⑤ 1578 年ごろ，カンボジア国王が大友義鎮に国書と銅銃，蜂蠟，ゾウとゾウ使い，鏡匠を乗せた商船を送るが，豊薩合戦で優位に立った島津義久に抑留される。
相良義滋 (1491 ？～ 1546)	肥後の戦国大名。「国料之商船」を琉球に派遣。1542 年，答礼として琉球王国側が砂糖 150 斤を相良氏に贈答。
相良晴広 (1513 ～ 55)	義滋の養子。1546 年，肥後宮原で銀鉱脈を発見。1554 年，新造した大名船「市木丸」に銀を積んで明に派遣。
島津貴久 (1514 ～ 71)	薩摩の戦国大名。薩摩，大隅，日向の守護職を兼任。1556 年と 59 年に，琉球国王尚元の使節を受け入れ通交する。
島津義久 (1533 ～ 1611)	貴久の子。1578 年の豊薩合戦で大友氏を破る。 ① 1574 年以降，薩摩，大隅，日向の各港から琉球をめざす船に，朱印状を発給。 ②豊後をめざしていたカンボジア国王使節の船を抑留し，1579 年 11 月，大友氏に代わってカンボジア国王へ書簡と産物を贈答。
松浦鎮信 (1549 ～ 1614)	平戸の戦国大名。1576 年，平戸に来航した使節を饗応してアユタヤ王国との外交関係を樹立。翌年には，アユタヤ国王に書簡と甲を贈答。
宗義盛 (1476 ～ 1521)	対馬の守護大名。1510 年の三浦の乱で，代々の朝鮮歳遣船権益を大幅に喪失。
宗義調 (1532 ～ 88)	1556 年 11 月，明使蔣洲の倭寇禁制宣諭を受ける。翌年朝鮮に遣使して丁巳約条を結び，朝鮮通交の権益を回復。
日比屋助五郎 (16 世紀前半～半ば)	堺の豪商。大内義隆派遣の 1547 年の遣明 2 号船に乗船し，日明貿易に従事。1560 年代に九州来航の中国船，ポルトガル船と取引した日比屋了珪は同族。
神屋寿禎 (16 世紀前半)	博多の豪商。石見銀山に権益を有し，代官を遣わして米銭で銀鉱石を買い付ける。大内義隆派遣の 1538 年の遣明船総船頭を務めた神屋主計は同族。
嶋井宗室 (1539 ？～ 1615)	博多の豪商。1568 年，商船「永寿丸」で朝鮮に渡海。兀良哈 (中国東北部) からの物資を買い占め博多に戻る。
仲屋顕通 (16 世紀前半～半ば)	豊後府内の豪商。年貢米の運用投資益や升の換算差益，米銭の交換レート益などで富商化し，大友氏と結んだ政商として大名公定分銅を発行，遣明船の派遣や渡来中国人との交易にも関わる。
仲屋宗越 (16 世紀半ば～末)	顕通の子。大友氏に加え豊臣氏とも結んで畿内から九州南部まで商圏を拡大し，顕通以来の秤量権益を拡充。カンボジア交易を手がける中国商人とつながり，大友氏のカンボジア交易にも関与。大友義鎮の新城下臼杵にも広大な屋敷を有する。

■ 16 世紀日本人の対外交渉関係地

地名 [日本]	出来事
松前	1457 年のコシャマインの蜂起以降，アイヌと和人の攻防が続くが，1550 年に蠣崎季広とハシタイン・チコモタインの間で協約を締結。
十三湊（とさみなと）	日本海航路を通じて若狭，畿内とつながる，安藤（安東）氏の本拠地のひとつ。
赤間関（あかまがせき）	1584 年，中国泉州からの商船が来航し，船主蔡福らが毛利氏の代官高須元兼と交易。
府内	① 1541 年，神宮浦に中国からのジャンク船が来航，明人 280 人が上陸して神宮寺に滞在。 ② 1571 年，府内滞在中の盧高（台州出身）と陽愛有（温州出身）が時宗寺院称名寺に梵鐘を寄進。
臼杵（うすき）	16 世紀半ばに大友義鎮が本拠地とする。陳元明らが居住する唐人町が繁栄し，豪商仲屋宗越が広大な屋敷を保有。
外浦（とのうら）	帰国途中の航路で喧嘩が起こった 1506 年出発の遣明 2 号船を，大友義長が外浦で抑留。
平戸	① 1542 年，倭寇の頭目王直が訪れて本拠のひとつとし，松浦氏の保護を受ける。 ② 1575 年，島津家久が平戸碇泊中の「唐舟」に乗船し，南蛮から大友氏への進物の「虎の子四匹」を見学。 ③ 1576 年，郭六官という中国人のジャンク船に乗ってアユタヤ国王使節が来航，松浦氏と外交関係を結ぶ。
八代	① 1538 年，相良義滋が大名船「市木丸」を建造し，琉球へ派遣。 ② 1554 年，相良晴広が新「市木丸」を建造して，明に派遣。
阿久根	1573 年，カンボジア交易を終えて豊後に帰国途中の大友義鎮の貿易船が大風避難で入港するが，港内で破船。
鹿児島	1549 年，アンジロー（鹿児島出身の日本人）の先導でフランシスコ・ザビエルが上陸。
硫黄山（豊後九重）	遣明船による最大の輸出品である硫黄鉱石の産地として，14 世紀以降に大友氏が直轄。
硫黄山（豊後塚原）	大友氏直轄の硫黄鉱山。同位体比分析により，堺出土のタイ産壺内残留の硫黄が同地産と判明。
硫黄山（薩摩硫黄島）	島津氏直轄の硫黄鉱山。14 世紀以降の遣明船のみならず，17 世紀の朱印船にも積んで東南アジアへ輸出された。
銀山（石見大森）	世界有数の銀鉱脈として 16 世紀半ばから 17 世紀前半に最盛。初期は博多豪商神屋寿禎が権益を有し，のち大内氏，毛利氏，豊臣氏，徳川氏らが争奪。
銀山（肥後宮原）（みやはる）	1546 年に相良氏によって発見・開発され，遣明船派遣の原資となる。

地名 [外国]	出来事
那覇	1574 年 4 月，島津義久が坊津（ぼうのつ）の「宮一丸」（船頭渡辺三郎五郎）の琉球渡海を許可する朱印状を発給。以後，16 世紀末にかけて義久による琉球渡海朱印状は 11 通を確認（根占（ねじめ）の「小鷹丸」，坊津の「権現丸」「天神丸」など）。
乃而浦（ネイポ）	1510 年 4 月，三浦（さんぽ）（乃而浦・富山浦（プサンポ）・塩浦（ヨンポ））の倭人が，対馬国守護代宗国親（くにちか）の援軍を得て暴動（三浦の乱）。
双嶼（そうしょ）	1544 年，寧波入貢を退けられた大友義鑑の遣明船が，六横島の双嶼で密貿易を行う。
定海	① 1539 年 5 月，大内義隆派遣の遣明船が舟山島の定海に入港。水・食料等の支給を受ける。 ② 1557 年，大友義鎮派遣の徳陽が定海の道隆観に滞在，倭寇と明官軍の攻防のなか，明側の張四維らと交渉する。
岑港（しんこう）	1557 年 10 月，大友義鎮派遣の巨大遣明船（正使は善妙）が舟山島の岑港に入港するが，明官軍からの攻撃を受けて沈没。
寧波	① 1453 年 4 月，大友親繁（ちかしげ）派遣の遣明船（6 号船）が硫黄 9 万 200 斤を載せて寧波に入港。 ② 1523 年，正徳勘合を携えた大内義興，弘治勘合を携えた細川高国双方の遣明船が，入貢の先後をめぐって寧波で衝突。大内側は細川船を焼き，放火・略奪は寧波市街におよぶ（寧波の乱）。 ③ 1539 年 5 月，大内義隆の遣明正使湖心碩鼎（こしんせきてい）が寧波の嘉賓堂（接待所）に入る。
北京	1540 年 3 月，大内義隆派遣の遣明使が北京に到着。皇帝拝謁儀礼をこなしながらおよそ 70 日間の滞在。
杭州	1540 年 9 月，北京入貢の帰路，大内義隆の遣明使が杭州の西湖を見学。
茂州	1559 年，大友義鎮派遣の清授が四川省茂州の治平寺に滞在。
浯嶼（ごしょ）	1559 年，舟山島から移動してきた大友義鎮派遣の遣明使が密貿易を行う。
マラッカ	① 1511 年，ポルトガルが東アジア貿易の拠点として占領。 ② 1547 年，ザビエルがマラッカの教会でアンジローと出会い，日本布教を決意。
ロンヴェーク	① 1529 年，ポスト・アンコール期の都としてチャン・リエチエ王が建都。 ② 1578 年ごろ，大友義鎮が「美女等物」を贈る。カンボジア国王（プリア・リエチエ・アンチャ＝サター 1 世）は返礼として，銅銃，蜂蠟，ゾウとゾウ使い，鏡匠を義鎮に贈る。
アユタヤ	1576 年，アユタヤ国王と松浦鎮信が中国人郭六官のジャンク船を介して，贈答品を授受。翌年にも，呉老のジャンク船を介して鎮信が甲を贈る。
ゴア	① 1510 年，ポルトガルがアジア貿易の拠点として占領。 ② 1552 年，大友義鎮がインド総督に派遣した使者（洗礼名ロウレンソ・ペレイラ）がザビエルとともにゴアに到着，聖パウロ学院で学ぶ。
マニラ	1571 年，スペインがアジア貿易の拠点として占領。ガレオン船でメキシコのアカプルコと結ぶ。

※堺，博多等の国内主要交易都市以外の従来見過ごされてきた都市や町，鉱山をピックアップした。

第一学習社

特集 ❷

「歴史総合」における世界史と日本史のつなげかた ―ペリー来航と日本の開国を事例に―

京都橘大学文学部准教授　後藤　敦史

はじめに

2020 年からの学習指導要領で新設が予定される「歴史総合」や,「日本史探究」,「世界史探究」に関して，歴史学界，教育学界において，今後さらに議論が高まっていくと予想される。とくに，近現代史を中心に，日本と世界の歴史を融合的に学習する，という必修科目の「歴史総合」については，ともすれば「日本史」と「世界史」が分断的にとらえられる嫌いのあった高校歴史教育を改善できる可能性もあり，注目が集まっている。

もちろん，予定されている「歴史総合」には，まだまだ議論・解決しなければならない問題点が少なくない。たとえば，2016 年 5 月 16 日付で，日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会が示した提言書でも，多くの課題があげられている[1]。

この提言であげられる課題のなかで,本稿ではとくに「世界と日本の歴史を結びつけて学ぶ」ためにはどうすべきか，という点について考えてみたい。

提言にあるように，日本に居住する高校生が学ぶ科目である以上,「歴史総合」が日本に大きな比重を置いたものになることは確かであろう。しかし，それと同時に,「東アジアの近隣諸地域をはじめ欧米も含む世界各地」との「多種多様な結びつき」によって「日本の歴史が存在した」という点を常に留意する必要があることも，提言書に示されるとおりである[2]。

この提言は，日本に大きな比重があるとはいっても，日本が他の国や地域に比べて“特別な存在”であるかのような歴史叙述になってはならない，という留意点も示唆している。確かに，近現代世界において日本という国家が重大な影響をもったことは，アジア太平洋戦争の事例も含めて間違いないことではある。しかし，そうした日本の歴史的動向は，まさに世界各地との「多種多様な結びつき」の相互作用のなかで生起していったものであり，結果論的に，日本の特殊性で説明づけることになってはならない。

とはいえ，これは実際には，言うは易く，行うのは難しいことであろう。日本の比重が大きいということは，世界史全体のなかで日本の歴史に言及することが多くなる，ということでもあり，その説明を聞いた高校生が，世界史のなかで実態以上に日本の歴史が重要であったと「錯覚」を抱いたとしても，無理はないのかもしれない。

しかし，グローバル化がますます進みゆくなかで,「自国史」が世界史のなかでどう位置づけられるのか，ということを客観的，かつ冷静にとらえられるという能力は，今後さらに重要となるであろう。

それでは,「日本史中心主義」的な考えに陥ることなく，世界史と日本史を結びつけるために,「歴史総合」ではどのような歴史を描いていくべきなのか。この点について，以下においては，筆者の研究テーマでもあるペリー来航を事例に，若干の考察を試みたい。

「ペリー来航史観（黒船来航史観）」の問題点

近年，日本の開国に関する研究では，従来の「ペリー来航史観」，あるいは「黒船来航史観」的な見方を批判し，克服するということが進められている。ここでいう「ペリー来航史観」,「黒船来航史観」とは，1853 年（嘉永 6）の同事件の歴史的意義を過度に強調する歴史観を指す。

誤解のないように述べておけば，ペリー来航が日本の歴史にとって重要な事件であったことは間違いない。それは，19 世紀当時を生きた人びとが書き残した記録からも，実感することができる。ペリー来航以降の史料には,「癸丑以来」といった表現がたびたび用いられている。癸丑は，1853 年の干支にあたるが，この表現は，ペリー来航がきっかけとなって社会が大きく変化した，と当時の人びとが認識していたことを示している。また，今も日本の各地域で保存されている古文書をながめても，ペリー来航関係の情報を書き留めたものは非常に多い。権力者，為政者ではない，いわゆる一般の人びともまた,「黒船来航」に大きな衝撃を受け，あるいは関心を抱き，情報を収集したということでもある[3]。

このように日本の歴史に大きな影響を与えたペリー来航に関して，なぜアメリカ合衆国はペリーを派遣したのか，なぜ日本の開国を求めたのか，という点についても，研究が進められてきた。その派遣の理由について，何が最も重要であったか，という点では議論が分かれるところであるが，列挙すれば，①太平洋で操業するアメリカ捕鯨船の避難港として日本の港を利用する，②アメリカの西海岸から太平洋を経由して中国にいたる蒸気船航路を開き，日本の港を石炭の補給地として利用する，③新市場としての期待，といった点が，アメリカが日本の開国を希求した理由として指摘されている。

このように，日本の近代国際世界への参入の大きな契機となった日本史上の重大事件であり，また，アメリカ合衆国という近現代世界において大きな存在感をもつ国の世界戦略に関わっている，ということもあり，ペリー来航という事件は，狭義の日本史研究者に限らない多くの研究者によって，さまざまな観点から研究が進められてきた。

しかし，このペリー来航の日本史上，あるいは世界史上

の意義を過度に強調することは，次のように大きな問題点がある。

まず日本史においては，ペリー来航の画期性を強調すればするほど，明治維新とその後の近代化の「流れ」があたかも必然であったかのような説明に陥りやすい，という問題点である。それは，幕府の倒壊と，天皇を中心とした国家の登場が必然であったかのような見方にもつながりやすく，いわゆる「皇国史観」的な理解を無意識のうちに是認することにもなりかねない[4]。

そして，世界史の文脈における問題点としては，日本史において重要な意義をもつペリー来航は，当然，アメリカの歴史，さらには世界史においても重要である，という「錯覚」を抱きやすい，という点があげられる。それは，日本史を実態以上に過大評価した世界史理解，という最初に言及した問題点ともかかわっている。この点について，アメリカ外交の展開過程を読み解きながら，具体的に考察を進めていきたい。

アメリカ外交のなかのペリー派遣

アメリカの東インド艦隊司令長官として来日し，日米和親条約の締結を果たしたマシュー・カルブレイス・ペリーは，200 年近くにわたって国を閉ざしてきた日本と条約を結んだ最初の文明国という称号をアメリカ合衆国は得た，ということを自身の功績として語っている[5]。

このペリーによる対日遠征事業については，大部の公式の遠征記録も刊行されている。その遠征記でも，同様にアメリカ合衆国が日本を開国させた歴史的意義が強調された叙述となっている[6]。

このような記録群に接したとき，アメリカ合衆国の外交史にとって，ペリー艦隊の派遣，および日本の開国が重要であったと判断しても，やむを得ないようにも思える。あるいは，ペリー来航から約 90 年後，1945 年 9 月にアメリカ艦ミズーリ号上で日本の降伏調印式がおこなわれた際に，ペリー艦隊の星条旗が掲げられていた，という有名なエピソードも，アメリカの歴史にとってペリー艦隊の派遣が重要な意義を持つことの傍証になりそうである[7]。

しかし，19 世紀中ごろのアメリカ外交において，果たしてペリー艦隊の派遣は，実際にはどのように位置づけることができるのであろうか。

従来，この点については，ほとんど検討されることがなかったといえる。アメリカ側の史料から日本の開国過程を描く，という研究手法はもちろんとられてきたが，その場合も，ペリー艦隊の派遣にいたるまでのアメリカ外交の展開に言及するのみで，当該期のアメリカ外交全体のなかにペリー艦隊の派遣を位置づける，という視点は総じて希薄であった。

もとより，本稿でアメリカ外交の「全体」を語ることはできないが，以下，次の 3 点を指摘して，ペリー艦隊の派遣をとらえ直してみたい[8]。

①対日使節派遣の「原案」

実は，対日使節としてのペリーには，ジョン・オーリックという前任者がいた。1851 年 5 月末に東インド艦隊司令長官に就任したオーリックは，同年 6 月，アメリカの国務省から対日交渉の権限を付与されている。

このときの国務長官からの訓令を，5 月の東インド艦隊司令長官就任時の海軍長官訓令と比べると，対日外交という点で，海軍省と国務省のあいだに大きな認識の差があったことがわかる。海軍長官も確かに日本への訪問を求めてはいるが，それは，可能であれば，という程度に過ぎない。それに対して，国務省は日本を「世界中の国々を結ぶ偉大な鎖の最後の環」と表現しており，同省がその開国を強く求めていたことがわかる。日本の開国を語る際に，アメリカの対日外交，というようにアメリカという国名でひと括りにして考えてしまいがちであるが，これらの訓令は，1851 年の時点で，部署によって日本に対する期待にも「温度差」があったことを示唆している。

ところで，もしオーリックがそのまま来日していれば，日本の歴史には，「ペリー来航」ではなく「オーリック来航」という事件が刻まれていたことであろう。しかし，オーリックはアメリカ本国を東アジアに向けて出発した後，艦上でトラブルを起こし，東インド艦隊司令長官を解任されたため，彼が来日することはなかった。その後任として同艦隊の司令長官を引き継いだのが，ペリーであった。

一方，もしもオーリックが来日していたとしても，ペリー来航のようにオーリック来航が日本の歴史に重大な影響を与えたのか，という点は，（歴史に「もしも」を持ち込んでも無意味ではあるが）疑問である。なぜなら，オーリックに対する海軍長官の訓令は，東インド艦隊司令長官の任務として，中国海域におけるアメリカ人の保護を指示しているからである。

一見，当然の指示と思われるかもしれないが，この指示は，オーリックが同艦隊司令長官に就任したのとほぼ同じ時期に中国で生じていた歴史的事件を考えると，重要な意義がある。中国清朝では，1850 年末ごろから，太平天国の蜂起が広がっていた。この太平天国による中国社会の動揺を考えれば，中国海域を拠点とする東インド艦隊の通常の任務として，同海域のアメリカ人の保護が優先されて然るべきである。そして，現に，中国に滞在するアメリカの外交官や，あるいは商人たちも，同艦隊にはその役割を期待していた。この点からいえば，オーリックがもしそのまま同艦隊の司令長官を続けていたとしても，対日遠征，さらに日本との交渉にどこまで労力を費やすことができたのか，検討の余地がある。

しかし，ペリーは違った。彼は，東インド艦隊司令長官への就任を命じられたとき，単なるオーリックの後任に甘んじるつもりはない，ということを明言していた。すでに 57 歳に達していたペリーは，自分の海軍軍人としての最後のキャリアを飾る事業として，対日外交を確実に成功させることを追求したのである。そのため，ペリーは海軍長官

第一学習社

に，自分が東インド艦隊司令長官として最優先することは，対日遠征事業である，ということを公認させた。その結果，彼は同艦隊の艦船を日本近海に集中させ，軍事的な圧力をうまく用いながら，徳川幕府との交渉を進めることができたのである。

一方，東インド艦隊を日本近海に集結させるということは，中国海域からアメリカ海軍の艦船が不在になる，ということでもある。このペリーの行動に対しては，たとえばアメリカに駐在していた弁務官のマーシャルという人物が批判し，ペリーと対立している[9]。また，中国近海で貿易を営んでいたアメリカ人たちも，ペリーに同海域にとどまることを請願したのであるが，ペリーはその願いをしりぞけるかたちで，日本に向けて艦隊を動かした。

こうしたペリーの行動については，これまでの研究でも指摘されてきたところではある。しかし，もう一歩進んで考えれば，これらの一連の経緯からは，実はアメリカの対日外交といっても，そこには，ペリーの個人的な構想，あるいは野心といったものが密接に関わっていた，ということがわかる。そして，そのペリーの構想は，中国海域にいるアメリカの外交官や貿易商たちの利害と対立する側面を有していたのである。

アメリカによる日本開国，というフレーズだけでは，アメリカの世界戦略にとっていかに日本が重要であったか，という議論に落ち着きやすい。しかし，アメリカの東アジア外交全体のなかに対日外交を位置づける，という視点を持つならば，ペリー艦隊だけを見ていてはならない。太平天国で揺れる中国の歴史とも関連づけながら，「多種多様な」相互作用のなかで日本の開国を説明する枠組みを築き上げていく必要がある。

②太平洋蒸気船航路をめぐる「点」と「線」

アメリカの世界戦略のなかでの対日外交，という視点から検討する場合，蒸気船航路の問題についても留意しなければならない。従来，アメリカが日本の開国を求めた理由として，太平洋に蒸気船の航路を開設し，東アジア市場へ迅速にアクセスすることによってイギリスの覇権に対抗する，ということがあげられてきた。この航路上に位置する日本列島が，石炭補給地として求められた，ということである。

一見，ペリー艦隊派遣の理由として，とてもわかりやすい説明である。確かに，この説明そのものは間違いではない。しかし，日本に限らず，太平洋というより広い視野で考えてみると，次の疑問がわく。

太平洋蒸気船航路を開く，という場合，その航路は「線」である。一方，石炭補給地と想定される日本は，その航路上に位置する「点」である。蒸気船航路という「線」をつくりたい，というアメリカ合衆国は，「点」を確保するためのペリー艦隊しか，派遣しなかったのであろうか。「点」を確保さえすれば，あとは「線」である蒸気船航路を開設できる，と考えていたのであろうか。

もちろん，そんなことはない。ペリー艦隊の派遣とほぼ同時に，アメリカ海軍は東アジアを含む北太平洋海域一帯の調査・測量を目的とした艦隊を派遣している[10]。「北太平洋測量艦隊」と称されるこの艦隊は，1853 年 6 月にアメリカ東海岸のヴァージニア州ノーフォークを出航し，3 年近くかけて北太平洋海域の測量に従事している。

しかも，その途次，1854 年 12 月には鹿児島湾を訪れ，また翌 1855 年 5 月には下田，6 月には箱館（函館）というように，日本にも立ち寄り，測量を実施しているのである。下田では，幕府に対して日本近海測量の許可を求める，ということもしており，この測量の可否をめぐる問題は，幕府内でも評議がおこなわれた。

このように，アメリカは単にペリー艦隊によって日本という「点」を確保しようとしただけではない。蒸気船航路となり得る「線」全体を調査する艦隊もあわせて派遣をしているのである。

にもかかわらず，これまで北太平洋測量艦隊についてはほとんど知られてこなかった。なぜなら，日本とそれほど大きな関係を有していないからである。上記のように，確かにこの艦隊は日本を訪れたのであるが，ペリー来航や，その後のハリスの来日，あるいはロシアの使節プチャーチンとの交渉，といった幕末外交史において有名な事件と比べると，「劇的」な外交問題を引き起こしたわけではない。そのために，日本史の文脈から，北太平洋測量艦隊の存在は忘れ去られていったのであろう。

しかし，本来であれば，アメリカの太平洋進出から日本の開国を読み解こうとするならば，ペリー艦隊だけではなく，北太平洋測量艦隊も含めて，当時，アジア太平洋に向けて展開されたアメリカ外交を俯瞰する必要がある。でなければ，アメリカの太平洋進出をめぐる外交の特質も，そのなかでの日本の位置づけも，大きく見誤るおそれがあるといえよう。

③日本を取り巻く多国間関係

最後に，日本の開国を描く場合に，単にペリー艦隊に代表されるアメリカの動きだけを見ればいい，というわけではない，という点も強調しておきたい。それは，日米関係史に限ることなく，19 世紀中ごろの日本，さらに東アジアをめぐる国際関係を，多角的な観点で考察する必要がある，ということでもある。

これまでも，アメリカの史料に限らず，イギリス史料，オランダ史料，ロシア史料などの活用によって，19 世紀中ごろの東アジアに対する欧米諸国の動向は，さまざまな角度から研究がおこなわれてきた。ペリー艦隊の派遣をめぐる動向に関しても，アメリカの対日遠征に対抗してプチャーチンを派遣したロシア[11]，ペリー艦隊派遣の情報を事前に日本に伝え，欧米諸国のなかで対日外交における存在感を発揮しようとしたオランダ[12]，あるいは中国情勢への対応で対日使節派遣には消極的でありながらも，アメリカの対日遠征に対して海図の提供などで協力的な姿勢を示

したイギリスなど[13]，日本を取り巻くかたちで，欧米諸国が競合や協力もあわせもった複雑な関係性を築いていたことが明らかとなっている。

ペリー艦隊に関わるアメリカ外交の動きだけを見ていては，当然，このような日本を取り巻く「多種多様な結びつき」は，見落とされてしまう。それは，アメリカとの関係ばかりに着目した，偏った日本の開国史を描くことにもなるであろう。

おわりに

「多種多様な結びつき」のなかに，日本を位置づけるためには，あるいは「世界史と日本史を結びつけ」るためには，どうすればいいであろうか。本稿では，ペリー来航を事例に考察を進めてきたが，ここから得られる所見として，次の点を指摘して稿を閉じたい。

「多種多様」とは，言い換えれば，「複雑」である。日本の開国の歴史を見ても，ひとつの国家の内部の多様な動きや，多国間の関係が複雑に絡み合っていた。また，東アジア近隣諸国・諸地域の動きも，当然，日本の開国過程に影響を与えていたであろう。このような複雑な関係性から目を背けることなく，一本一本の糸を解きほぐしていくように，研究を進めていくしかない。

歴史学および歴史教育は，その複雑な関係性を，できるだけ分かりやすいかたちで，高校生たちに，ひいては社会に還元していく必要がある。そして，そのなかで，日本に言及することを意図的に多くしつつ，あくまでも歴史的な主体のひとつとして，慎重に取り扱うことも重要となる。それが，「歴史総合」における日本に関する歴史叙述の，大きな特徴にもなるであろう。

一方，これまで何度も指摘されてきたように，現行の高等学校における「世界史」と「日本史」は，世界史はあまりに日本史に関する叙述が少なく，日本史はあまりに世界史の叙述が少ない，という問題点を抱えている。この問題点をかえりみることなく，そのまま世界史と日本史の教科書を「合体」させても，「歴史総合」の教科書にはなり得ないし，取り扱いを間違えれば，「日本史中心主義」的な世界史理解を導出しかねない。

すでに「歴史総合」の教科書をどのようなものとすべきか，「歴史総合」そのものが，どういった科目であるべきか，あるいは，日本に生きる人びとが，どのような世界史認識を抱くのが望ましいか，といった点について，多くの論者からさまざまな議論が提起されている[14]。今後も，さらに歴史学界や教育学界全体を巻き込むかたちで議論が活性化していくことを願いたい。

1 日本学術会議ホームページより閲覧（2017 年 4 月 10 日）。
2 同上，4 頁。
3 岩田みゆき『黒船がやってきた』（吉川弘文館，2005 年）。
4 鵜飼政志「ペリー来航と内外の政治状況」（明治維新史学会編『講座明治維新 2 幕末政治と社会変動』有志舎，2011 年）。
5 金井圓訳『ペリー日本遠征日記』（雄松堂出版，1985 年），347 頁。
6 オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』下巻（万来舎，2009 年），223 頁。
7 江戸東京博物館編『ペリー＆ハリス』（江戸東京博物館・読売新聞社，2008 年），116 頁。
8 以下，とくにことわりがない限り，拙著『忘れられた黒船』（講談社，2017 年近刊予定）を参照。
9 加藤祐三『黒船前後の世界』（岩波書店、1985 年）。
10 北太平洋測量艦隊については，上記の拙著のほか，拙稿「アメリカの対日外交と北太平洋測量艦隊」（『史学雑誌』124 編 9 号，2015 年）もあわせて参照。
11 ロシアの動向に関しては，和田春樹『開国―日露国境交渉』（日本放送出版協会，1991 年），麓慎一『開国と条約締結』（吉川弘文館，2014 年）など。
12 ペリー来航の予告については，岩下哲典『予告されていたペリー来航と幕末情報戦争』（洋泉社，2006 年）。オランダの対日外交については，松方冬子『オランダ風説書』（中公新書，2010 年）など。
13 イギリスの海図提供については，拙稿「幕末外交と日本近海測量」（『歴史学研究』950 号，2016 年）。
14 たとえば，君島和彦「高校必修新科目「歴史総合」はどうあるべきか」（『歴史学研究』956 号，2017 年）など。

第一学習社

特集❸

クラブ活動で生徒に教わった「歴史総合」の可能性

鎌倉学園中学・高等学校教諭　風間　洋

◆はじめに－新必修科目「歴史総合」発表のころ

「ねえ，今朝の新聞みた？今度の学習指導要領から科目の世界史を見直して，『歴史総合』って科目が新設されるらしいよ。詳しいことは，文部科学省（以下，文科省）が指導要領を発表していないからまだ分からないけど，どうやら世界史Ａと日本史Ａが合体するようだよ。」

「え～，日本史の他に世界史も併せて教えるのかぁ，授業準備が大変だなぁ，最近日本史しか担当してこなかったからまた世界史やり直さないと･･･」

2015 年 8 月 5 日，文部科学省による新学習指導要領の素案が各マスコミで報道された翌日，本校の地歴教員の間で交わされた会話は，多分このようなものだったと記憶しています。

「やれやれ，ただでさえ現場は忙しいのに，文科省もまた厄介な科目を創設してくれたものだな。まぁ，2022 年度の素案だし，まだ先だから･･･」

これが当時の率直な感想でした。本稿を読まれている教員諸氏の中にも筆者のような方はいませんでしたか？

当時筆者は，高校三年生のクラス担任を受け持ち，運動部と文化部掛け持ちでのクラブ指導，少子化による生徒の確保のための広報活動など，目前の雑務に忙殺されており，本来の職務である教材開発や授業研究への意欲は大変希薄でした。ましてや新科目の導入など，現場を知らない文科省が新たな「負担」をかぶせてきた，としか映っていませんでした。

しかし，そういってもいられない状況が刻一刻と迫っています。2017 年度には「歴史総合」を含む新学習指導要領が発表される予定で，2022 年度には実際に授業を始めなければならないのです。

日本学術会議や大学教員，教育専門家が様々な媒体で現在この新必修科目について論じています。また，2015 年には歴史教育改善のための全国組織として「高大連携歴史教育研究会」が大学・高校教員間で設立され，同会が翌年 6 月に神戸で開催した「『歴史総合』に関する研究大会」は関心ある教員たちで会場が満員だったと聞いています。

今回は幸甚にも「歴史総合」をテーマに執筆の機会をいただきましたが，研究者の立場ではなく授業やクラス運営に日々追われている一教員の立場として，この「歴史総合」に対する雑感を述べさせていただきます。

昨年，長年クラブ顧問をしている考古学部の部員との活動を通じて，それまで「負担」にしか感じなかったこの新必修科目に対する考えが，少し変わりました。本稿は，そんな一クラブのささやかな活動を紹介することで「歴史総合」への新たな「可能性」を示したいと思います。

ただし，現時点（2017 年 4 月）においては，学習指導要領はまだ発表されておらず，内容が確定していません。そこで本稿では，文科省教育課程部会の下部組織のワーキンググループが既に公表している「歴史総合」の検討素案をもとに考察していることを予めお断りしておきます。

◆１．鎌倉学園　考古学部の取り組み

❶鎌倉学園考古学部の紹介

筆者の勤務する学校は，神奈川県の古都鎌倉にある仏教系の私学の男子校で全校 1,300 人余，間もなく創立 100 年を迎える伝統校です。周囲は深い緑と建長寺や鶴岡八幡宮など多くの神社仏閣・史跡に囲まれ，歴史を学ぶには大変恵まれた環境にあります。

クラブ活動が盛んなことが特徴で，40 余の運動部・文化部が存在し，多くの生徒が日々活動しています。その中に筆者が顧問を務める「考古学部」があります。戦後まもなく創部され，かつては部の名称通り，近所の遺跡現場で発掘のお手伝いをして原始・古代の研究をしていたようです。しかし，高校生が発掘作業をする機会もなくなってしまった昨今では，歴史の好きな生徒たちが集まり，年間の共通テーマを設定して調査・研究を行い，研究発表大会や学園祭などでその成果を展示・発表する，という活動を続けています。現在の活動内容は「考古学」ではないかもしれませんが，先輩から受け継がれてきた伝統あるクラブ名であるため，この名称を使用し続けています。現在 10 名弱の部員が活動しています。

❷研究テーマの設定

毎年 1 月に，年間をかけて調べる研究テーマを決定します。昨年，部長から「今年は幕末から明治にかけて日本の近代化に貢献した『お雇い外国人』について調べたい」という提案がありました。これまでは歴史好きな男子というと，戦国時代の武将や合戦，幕末・維新期に活躍した志士などをテーマ設定することが多かったため，今回のテーマに意外な感じを持ちました。テーマ設定の理由を聞くと，昨年の海外研修旅行で北米の大学で受けた体験授業の際，大学のインターンや東南アジアの留学生と日本の近代化の要因についての討論が行われたことが契機だったようです。彼らが「日本の近代化」という大きなテーマを自己の身近な体験から結びつけ，「お雇い外国人」という研究テーマを立ち上げてきたことに，今年のテーマに懸ける部員たちの熱意を感じました。

❸調べ学習～文献購読と博学連携～

こうして研究テーマが「お雇い外国人」に決定すると，それに関連した調べ学習がはじまりました。各部員は，まずお雇い外国人について書かれた基本文献を購読し始めます。今どきの生徒なので，導入にはインターネットを活用していたようですが，やがて県立図書館や博物館の資料閲覧室にも通うようになりました。特にお世話になったのが，横浜開港資料館の閲覧室です。ここには幕末から昭和初期にかけての横浜の歴史資料が豊富に揃っているのはもちろんのこと，専門の研究員が常駐しており，様々なレファレンスに対応してくれます。高校生の稚拙な質問にも丁寧に対応して下さり，更には，研究の進め方やテーマの章立てにもアドバイスをいただきました。

▲開港資料館で説明を受ける生徒達

もちろん，資料館に展示されている幕末・維新期の資料も参考になることは言うまでもありません。ちょうど日独修好 150 周年の記念展示として，「ドイツと日本の交流の足跡」展が開催中で，お雇い外国人として明治政府に招かれたドイツ人の業績に関して解説していただきました。この展示で部員たちは，横浜に居留していた外国人の古写真・古地図などに興味を覚えたらしく，その迫力に魅了され，食い入るように見学していた姿が印象的でした。本の活字からだけでは得られない視覚的な「資料＝展示物“モノ”」は具体的でわかりやすく，生徒にとってもイメージをつくりやすいようです。

近年，学校と博物館との連携事業が盛んに叫ばれています。小・中学校を中心に学芸員が学校に赴く出前授業や，生徒に博物館の展示室をめぐらせながら，ワークシートを完成させてゆくロールプレイング型の実践報告をみることがありますが，高校の教育課程で博物館との連携を試みた事例報告をほとんど知りません。高校生に穴埋め式やクイズラリー形式のワークシートはもう必要ないと思います。「この資料館には自分たちの知りたいことに対する答え（資史料）が詰まっている！」今回の部員たちは，それに気付いたことが最大の収穫だったと思います。部員たちも，こんなに何度も同じ博物館に足を運ぶ経験はなかったようです。

これがご縁となって，筆者も同館の研究員と，高校の歴史教育プログラムについて話し合うようになりました。高校教育と博物館の連携については，本稿の目的ではありませんので，いずれ別稿にてご披露したいと思います。とりあえず，現在では神奈川県高校文化連盟所属の県内の高校歴史クラブにも声をかけて，20 校弱の歴史クラブが同館を定期的に訪問し，研究員の方から展示見学や周辺の史跡見学を解説，研究上のご指導をいただく行事が定着するようになりました。

❹史跡踏査の重要性

平日の考古学部の活動は，どうしても資料を調べたり，文章を書いたりする室内での活動が多いため，日曜や学校の長期休暇中には，顧問としても部員たちをできるだけ校外に連れ出し，テーマに関連した史跡を踏査させるように意識しています。

部員が歴史の「現場」を訪れてその地に立つことによって，それだけで歴史上の人物や事件の臨場感・親近感が増すことは疑いありません。踏査の企画も，できるだけ部員たちにさせるようにしました。東京都千代田区のニコライ堂，台東区の旧岩崎邸（建築家コンドル），文京区の東京大学構内（ドイツ人医師ベルツ）など，都内で日帰り訪問できる関連史跡はもちろんのこと，春と夏の長期休暇には 2 ～ 3 泊の合宿も実施しました。春には群馬の富岡製糸場と絹産業遺産群を，夏には北海道の札幌や小樽の開拓使関連遺跡群を踏査しました。

実施前は，富岡製糸場では製糸技師ブリューナ関連，北海道では開拓使顧問ケプロンやクラーク関連の資料に生徒が関心を持つものだと思っていましたが，そのお雇い外国人に教えを受けた日本人たちの業績に大変関心を持っていました。先入観は禁物です。教員の目論見が，よい意味で裏切られた思いがしました。

❺-１　研究成果のプレゼン　その１～学園祭展示～

本学は 6 月に学園祭があり，考古学部もこれまで調べてきた内容を展示します。インプットしてきた内容を整理し，外部に発信する場として，部活動の中でも学園祭は上半期の大きな行事として位置付けています。

この時点では，研究課題すべてを調べ終えたわけではないので，中間報告的な内容となります。また「お雇い外国人」が何たるかも知らない一般の来場者も来るため，展示の工夫が必要です。スペースは教室 1 つ。限られた空間と少ない部費の中でどうやりくりするか，部内で様々な意見が交

換されて部長がそれを集約します。

展示構成案を部長から示されたとき，もう顧問には指導の余地はほとんどありませんでした。彼らはそれまでに，踏査や合宿で多くの博物館・資料館の展示資料を見学して，研究テーマの知識を得ていましたが，それだけでなく展示技術のノウハウ，いわゆる「博物館学」も併せて吸収していたようです。

導入から終わりまでの展示構成，観覧者の導線をどうするか，展示物のディスプレイ方法，そのキャプションの付け方，レプリカやジオラマ模型の作り方，さらには「初心者のためのお雇い外国人講座」なるプロモーションビデオまで作成して常時放映していました。もちろん会場内では，常時部員たちが展示解説員として来場者に説明を行い，質問に対応する体制を整えています。配布する展示リーフレットや冊子類も，博物館の図録等を参考にして彼らなりに再構成した立派なものになっていました。筆者もかつて大学で博物館学芸員課程の「博物館展示論」なる講座を受講しましたし，実習も行いました。思い返せば，彼らとあまり変わらないレベルだった気がします。

❺-２　研究成果のプレゼン　その２～研究発表大会～

11 月には県内の社会科系クラブが一堂に集まり，一年間の研究成果を披露する神奈川県社会科研究発表大会が開催されます。県内の歴史クラブでは，これを年間の活動の集大成と位置付けているところも多いようです。

もちろん高校生といえども，参考文献の引き写しではなく，彼らなりの調査や考察から得られた新知見を 15 分の制限時間内で盛り込まなくてはなりません。内容は審査員（博物館学芸員・研究員や大学の歴史教員などを招聘）に審査していただき，発表終了後には質疑応答もあります。また，会場には生徒の保護者や卒業生，一般生徒も来場していますので，「専門性」と同時に「わかりやすさ」「プレゼン力」等も求められます。

この時，顧問としての指導はほとんどしませんでした。研究テーマ設定の動機をきちんと示すこと，お雇い外国人来日の背景を日本の近代化，更には世界史の動きの中で位置づけること，そして，調べた成果を現代の日本に生きる自分たちの今後にどう生かしていくかの展望を述べること等を，軽くアドバイスしたと思います。

何度もパワーポイントを作り直しては，プレゼンの練習を連日遅くまでしていた彼らの努力が実りました。見事本学の考古学部の「お雇い外国人」発表は県で一位を獲得，今年の夏に栃木県足利市で行われる全国大会に出場します（ちょっと自慢です）。

◆ 2.「総合学習」との関連

さて，昨年の考古学部の一年の活動を冗長に述べてきたのは，別に本学のクラブ活動の喧伝をするためではありません。文科省ワーキンググループの検討素案をみた際に「去年の考古学部部員が取り組んできた活動って，意外に学習指導要領や新科目『歴史総合』が求めていることに通じるものがあるのではないか」と率直に思ったからです。検討素案では「歴史総合」のイメージを「自国のこと，グローバルなことが影響しあったり，つながったりする歴史の諸相を学ぶ科目」としています。

そもそも今回の新科目「歴史総合」設置は，2006 年時に発覚した世界史未履修問題に端を発し，これに対する日本史必修化の動きが出てくる中で，現在の高校歴史教育の問

題点が顕在化してきたからです。すなわち「日本史・世界史との分離をどう克服するか」，ここから歴史教育の見直しが始まったといわれています。

周知のとおり，日本史の教科書には世界史の要素がなく，世界史には逆に日本史の叙述がほとんどありません。今回部員たちが「お雇い外国人」のテーマを設定したのは，自己のグローバル研修の体験に基づいています。「お雇い外国人」が来日した時の世界と日本の情勢をリンクさせて，ダイナミックに理解していました。彼らの探求心に世界史・日本史の壁は存在しません。

研究発表大会では，将来の自分たちができることとして，「僕たちは発展途上国へ技術や知識を伝える『お雇い外国人』になるべきだ」という提言まで発信していました。現在の自己の問題として研究テーマに対峙している彼らに，私が逆に学ばせてもらいました。

思うに，世界史・日本史の枠組みにとらわれているのは，むしろ教員（自分）の側ではないかと感じています。「歴史総合」を本稿の冒頭で嘆いた筆者のような教員が，「日本史Ａ」の上に「世界史Ａ」の教科書を合冊したものと捉えて授業を行ってしまうと，どうなるでしょうか？

これまで通り入試で頻出する用語を並べ，生徒に知識を注入する授業を展開してしまいそうです。生徒が覚える歴史用語が 2 倍になるだけで負担が増大，再び未履修問題が繰り返されることになりかねません。根本的に指導方法から変えていかなくてはならないことが予想されます。

この点，検討素案では「歴史の転換の様子を捉える『継続と変化』，因果関係を捉える『原因と結果』，特色を捉える『類似と差異』などの，歴史の考察を促す概念を重視」，また「歴史の中に『問い』を見出し，資料に基づいて考察し，互いの考えを交流するなど，歴史の学び方を身に付ける」ことを目指しています。つまり「歴史総合」では，教員の役割としては，歴史の概念や学び方を教えることを，一方生徒たちには，自身で歴史的事象に関して問いを立てて調べ，討論し，発表する能力を期待しています。

これに対応するための有効な授業形態として，「アクティブ・ラーニング」が注目され，実践報告も多数みることができます。皆さん周知のことなのでここでは深入りはしませんが，筆者の感覚でいえば，部活動における「クラブ顧問」役に教員が徹することではないか，と思っています。あまり生徒に教え込まず，「見守る」ことが大事ではないかと思っています。

まだ筆者の教員経験が浅かった頃，立派な研究発表や展示をさせようと自分があれこれ部員たちに口出しをして，失敗した苦い経験があります。今回紹介した考古学部の研究活動では，筆者は史実の誤りなど以外，彼らの結論や解釈に指導はしませんでした。今度の「歴史総合」の指導法も，基本スタンスはこれを貫こうと思っています。もちろん，放置とは違います。生徒の中で資史料の解釈に困っている者がいたり，議論が迷走している状況となったら，教員はすかさずフォローアップする必要があります。生徒が脱線しないよう，与えるプリント（ワークシート）や資史料，使用する歴史用語の「精選」が一層必要となるでしょう。教員は，授業よりも，むしろ準備に仕事の重点が移っていくことが予想されます。

ただ，これまでのような講義形式の授業形態が全くなくなってしまうとも思えません。問題解決学習と講義形式のバランスを如何に取るか，これは今後の課題だと思います。

おわりに

新必修科目「歴史総合」の導入を控え，歴史系クラブの顧問の立場で携わった昨年の活動から何かヒントを得られないか，という気持ちで縷々述べさせていただきました。部員数名のクラブ活動と 40 名以上の生徒に対する授業ではもちろん単純比較はできません。与えられた時間（「歴史総合」は 2 単位）も，生徒の歴史への関心の度合いも全く違います。

ただ，学習・研究テーマを設定し，それを調べ，討論し，成果を発表する過程では，かなり類似点もあるのではないでしょうか。

新科目「歴史総合」導入の発表当時，筆者は負担が増えることばかりに嘆いていましたが，今回考古学部の部員たちの活躍に少し自信をもらったように思います。

「部員のみんなありがとう。先生も新科目の『歴史総合』にむけて，ちょっと頑張ってみるよ。」

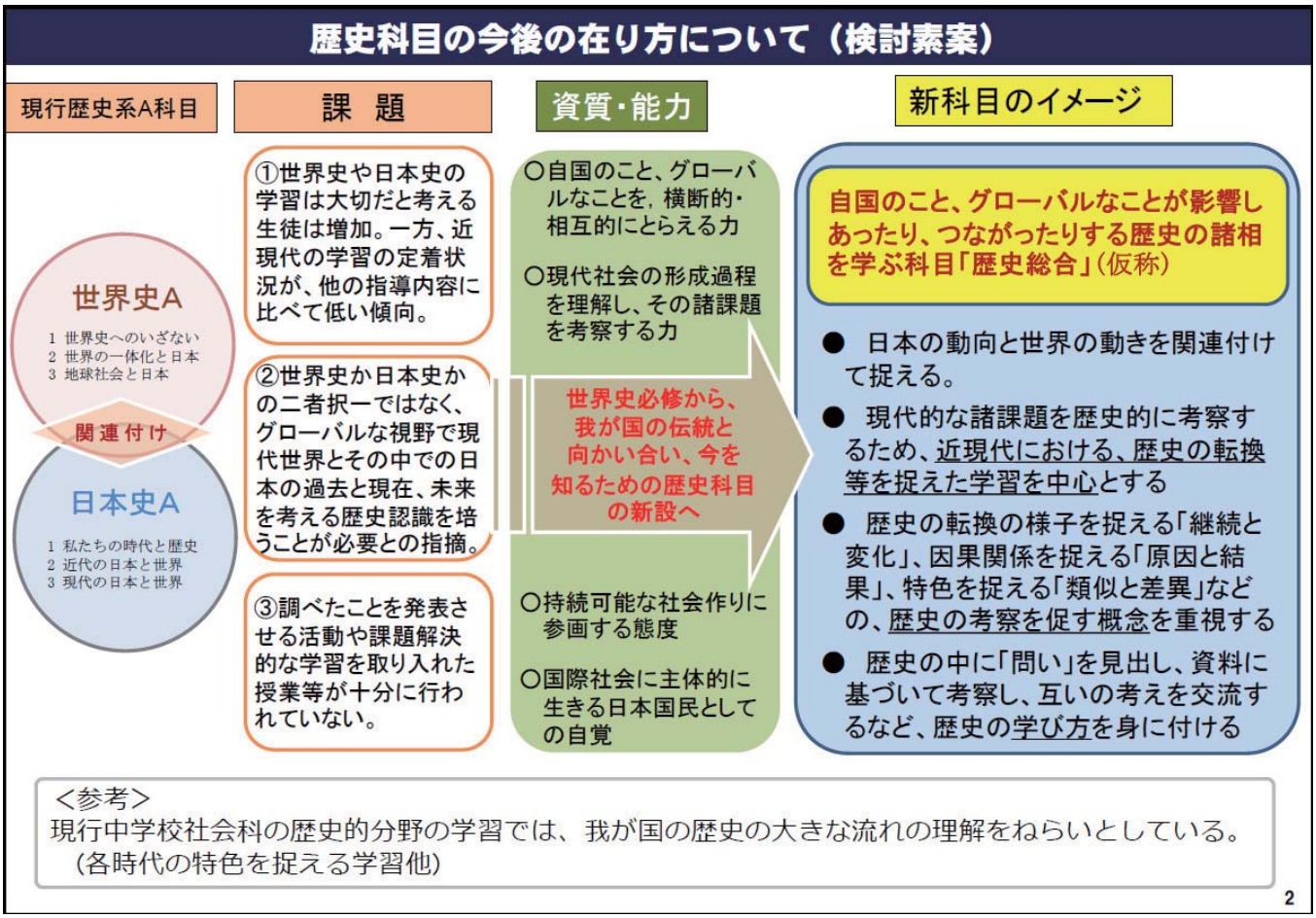
参考文献

・鎌倉学園考古学部『お雇い外国人』冊子 私家版（2016. 11）
・君島和彦「高校必修新科目『歴史総合』とはどうあるべきか」『歴史学研究』956 号（2017. 4）
・久保亨「学術会議の歴史基礎案」『歴史評論』749 号（2012. 9）
・久保亨「高校歴史教育の見直しと『歴史基礎』案」『歴史評論』781 号（2015. 5）
・日本学術会議史学委員会「提言 再び高校歴史教育のあり方について」（2014. 6）
・日本学術会議史学委員会「提言 『歴史総合』に期待されるもの」（2016. 5）
・油井大三郎「歴史的思考力の育成と高大連携」『歴史評論』781 号（2015. 5）

参考サイトの URL

文部科学省ワーキンググループ◆ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/071/siryo/1372399
全国高等学校社会科研究発表大会◆ http://kana-social-science.wixsite.com/kanagawakoubunren
高大連携歴史教育研究会◆ http://www.kodairen.u-ryukyu.ac.jp
日本学術会議◆ http://www.scj.go.jp/ja/info/index.html

第一学習社



出典：2015年8月　中央教育審議会（第100回）　配付資料5-4.「高等学校等における教科・科目の現状・課題と今後の在り方について（検討素案）」
（文部科学省ホームページ　http://www.mext.go.jp/）

特集 ❹

地理的面白さを広めるために

お茶の水女子大学地理学コース准教授　長谷川　直子

1．「地理」に対する社会の誤解を解きたい

私は大学で地理学を教える立場にありますが，一般の方と話をすると，「地理は地図と地名だけ，暗記でつまらない」という意見をよく聞きます。しかし地理とは決してそのようなものではなく，「なぜその地域がそのような特徴を持っているのか」を明らかにするためにあると思っています。そのためにいろいろな知識は必要になりますが，それらの知識を暗記することが地理を学ぶ主目的ではありません。しかし暗記が主目的になってしまっているとすれば，私たち大学教員が関わる大学入試の問題も大きいのだろうと思っています。

前述のような声を聞く中で，地理の面白さを一般の方たちに広められないかと思い，数年前から地理学のアウトリーチ[1]についての検討を始めています。例えば，旅行の中に地理の視点を取り入れてみる。旅行はどこかの土地に行くので，その土地がどういう場所であるのかを知る絶好の機会です。市販の旅行ガイドブックの多くはお店や観光スポットの羅列で，なぜその場所にそれがあるのかといった記述があまり見られないのが残念なところです。そこで，旅行ガイドブックのように一般の方が気軽に読める形で，地理の視点を取り入れたものを作れないかと考えました。

2．大学の授業成果を発信する

大学の授業は比較的自由に学習内容を設定できるので，前述の「地理の視点を取り入れた旅行ガイドブック」のように，あるエリアをフィールドに地理の視点を取り入れた「まちあるき」のガイドマップを作る演習授業を行っています。この授業は，①市販の旅行ガイドブックには地理的な記載がほとんどないことを確認，②対象エリアの地誌の調査，③学生が各地点を分担し，他の学生を案内して地理にまつわるその地域を特徴付けるスポットの説明をする（いわゆる巡検です），④学生がそれぞれ好きなテーマを設定し，地図と地理の解説を組み合わせたガイドマップを作成する，といった流れで行います。

この演習を高校の授業に応用する例としては，まず地誌の授業の時に生徒たちに任意の市販旅行ガイドブックを持ってきてもらい，その中に地理の視点がどれくらい取り入れられているか（ほとんどないことに気づかせます），地理の教科書の内容とどの辺りが異なっているのかを比較してもらいます。そのうえで地理の視点を持って旅行に行くと何が違って見えるのかを考察してもらうとよいのではないでしょうか。大学の授業でも，「地理の視点で市販のガイドブックを検討したことで，その後に旅行ガイドブックを見るたびに地理の視点でチェックするようになってしまった」と学生が言っていました。きっと高校生もそうなると思いますし，そこから地理の視点を持つことが定着していくことにもつながると思います。

さてこの演習では，旅行ガイドブックと地理の融合を目指していますが，それにとどまらず，一般社会の中で広く受け入れられているコンテンツ（旅行に限らず，ご当地ネタやいわゆる「サブカル」と呼ばれるもの）に地理の知識を組み合わせて，今までよりも多くの人たちに地理の面白さを広く知ってもらいたいというのが，地理学のアウトリーチを始めた動機です。

2016 年３月には，この演習授業の成果を中心として，『地理×女子＝新しいまちあるき』（月刊『地理』2016 年３月増刊号，古今書院）を出版しました[2]。編集に際しては，表紙，タイトル，雑誌の構成やデザインなどを学生の有志が中心となって行い，学生ならではの遊び感覚を生かすことを大切にしました。その結果，文中には顔文字や（笑）などが多用され，およそ学術雑誌とは思えない仕上がりになりました。

▲図１　学生が作成した雑誌の表紙

学生たちの発信活動とそれに対する社会からの反応を見ていて，学生ならではの遊び感覚や斬新なアイディアなどは頭の固い研究者には作ることのできないものであって，それらが社会の中で評価されているのではないかと考えています。例えば，月刊『地理』の表紙には，「地理」というオレンジのゴシック文字が示されていますが，今回月刊『地理』の増刊号として出版するということで，「地理」に女子をかけちゃえ！とパロディー風にタイトルをつけました。表紙のデザイン（図１）は，学生たち自身によると，お茶大生のイメージが芋っぽいとかレトロであることから，「袴姿で巡検しちゃえ！」というノリで袴を自分たちで用意して着付け，写真部の友達と一緒に表参道へ行って撮影を行いました（外国人観光客の方々から一緒に写真を撮って欲しいと何度も言われたそうです）。実際に，表紙に惹かれて購入したという声もたくさん聞きました。この経験から，専門家による専門性の高い学術的な情報の発信が必要であると同時に，専門家・非専門家にかかわらず地理の面白さを伝えて地理のすそ野を広げる発信がもっとあってもよいのではないかと考えました。地理が好きな学生は，地理の面白さを多くの人に知ってもらいたいという気持ちを持っています。また学生だからできるソフトな発信だからこそ，気軽に手に取った読者層が存在すると考えています。

監修した教員からの振り返りとしては，学生有志で作ることによる，様々な危うさがありました。今回の出版にあたっては，デザインソフトを使いこなせる学生，キャッチコピーを考えるのが得意な学生，文章力のある学生などが有志で参加していたため，なんとか期日までに仕上げることができましたが，毎回このような学生たちが揃うとは限らないですし，入稿までは常に時間に追われたギリギリの状態でした。結果，校正も十分にできず間違いがたくさん残ったままの仕上がりになってしまいました。

この出版について，学術界の一部の方々からはかなり厳しい評価をいただいた一方で，地理の敷居を低くして間口を広げたといったポジティブな評価もいただきました。学びの途上にある学生が何かを発信することへの批判もありますが，個人的にはそれも学生にとっては貴重な学びの一つと考えています。

◆ 3．学生主体の発信とその波及効果

この出版がきっかけとなって，今まで男性的なイメージがあった「地理」に女子がいるということが社会的に話題となり，学生がテレビ（「タモリ倶楽部」地理女と夢の合コン）やラジオに出演したり，新聞に取り上げられたりする機会がありました。その後も地図会社のゼンリンさんと学生が共同企画して地図グッズを制作しています[3]。図２は地図グッズの一部で学生が制作した手書き地図の例です。雑誌の出版時には出版社の方や読者の方と，「タモリ倶楽部」出演時には番組制作会社や視聴者の方と，グッズの作成時にはゼンリンの担当者の方と，それぞれやりとりを行う中で，学生たちは社会の厳しさや企業からの視点，世間が考える「地理」や「女子」に対する見方を学んでいたと思います。中でも特に，「タモリ倶楽部」の経験は学生にとっても強烈だったようです。学生たちが広めたいと考える「地理」と世間（や番組制作会社）が考える「地理」にズレがあること，地理を広めるために出たつもりが放送ではステレオタイプな「地理」や「女子」が強調されていたことに対する違和感などを覚えていました。

▲図２　ゼンリンと共同企画した地図グッズの中で学生が制作した地図の例

2016 年 10 月には日本学術振興会が主催する「ひらめき☆ときめきサイエンス」のイベントとして地理女子による「まちあるき」を開催し，全国から女子中高校生 20 名が参加してまちあるきを行いました[4]（写真３）。これまで地理好きな中高校生と大学生がともに談笑しながら巡検を行う機会はあまりなかったと思います。参加した生徒さんの中には，大学生顔負けに地理に入れ込んでいる方もいました（「東海道をすべて歩いて，箱根の峠を下駄で越えた」ことがあるという生徒さんも！）。実施場所は原宿・表参道で，買い物に来たことがあるため興味があって参加したという生徒さんも数人いたのですが，買い物に来ただけではわからない原宿・表参道の新たな一面を知ることができたことや，大学生と楽しく交流できたことなど，参加した生徒さんからの反応はとても好評でした。

◀▼写真３　女子大学生と女子中高生によるまちあるきの様子（左：代々木公園，下:表参道）

◆ 4．地理の発信をさらに加速させるために

私は有志のメンバーと一緒に 2016 年３月，日本地理学会に地理学のアウトリーチ研究グループを立ち上げました[5]。メーリングリストでの情報交換を中心に，どうすれば地理の普及が進むのか意見交換をしています。この研究グループでは現在,①地理ポータルサイト（サブカルチャーの地理から公的機関の地理まですべてを１カ所で見渡せるサイト）の作成，②５年後の高校地理必修化へ向けて歴史の先生方が地理を教えることになる可能性が高いため，地理を専門としない先生方が地理の基本を理解できる概説書の出版，③地理と歴史の接点を知ってもらう連載の企画などを進めているところです。アウトリーチという性質上，研究グループのメンバーには日本地理学会会員以外の方も多く参加しており，高校の地理の先生も複数おられます。

私が大学で所属する地理学コースは，２年生からコースを選択します。高校で地理を履修せずに大学へ入学し，１年時に幾つか地理の授業を受講して地理の面白さを知って地理へ進学したという学生が少なからずいます。そういう意味では高校での地理必修化はすべての高校生が地理の面白さに触れられる機会になるので，地理の人間からすると喜ばしいことです。一方で，教育現場では地理を専門としない教員が担当するケースが増えるので，それらの先生方が十分に地理について理解でき，教える時に戸惑わないようなサポートをする必要があるとアウトリーチの研究グループでは考えています。

「地理総合」の詳細はまだこれから決まっていくと思いますが，大きなカテゴリとして，防災と GIS が加わるということになっています。防災については生活の中で直結するテーマであり，生徒たちの興味を引きやすいと思います。GIS について，この単語がなんとなく難しそうなイメージを持たれている先生が多いかもしれませんが，難しいソフト等を使わなくても，ネット上でフリーで使える面白いデジタル地図がたくさんあります。例えば「今昔マップ[6]」は，埼玉大学の地理の先生が個人的に開発したフリーサイトですが，右の画面がグーグルマップ，左の画面に同じ場所の古い地形図が表示されるようになっており（古い地形図の時代は様々選べます），例えば高校や自宅周辺の過去の様子を簡単に知ることができます。他にも国土地理院の道具箱等，いろいろとお伝えしたい情報がありますが，とてもたくさんあるので，今準備を始めている書籍の出版をお待ちいただけたらと思います。

◆ 5．地理学のアウトリーチを進めてすそ野を広げる

数年前，NHK の番組「ブラタモリ」が日本地理学会賞を受賞しました。地理の人間からすると「ブラタモリ」は非常に地理的な番組だと感じるのですが，一般の方にはあまりそのように思われていないようです。「ブラタモリ」以外にも,例えば「秘密のケンミン SHOW」や「出没！アド街ック天国」もそうですし，路線バスを使った旅番組やその他の旅番組にも地理的な要素が含まれています。このような番組がこれだけたくさんあるということは，社会からは地理的な情報への潜在的なニーズがあるということだと思っています。特に最近では「地理」と名のつく一般書が多く出版されています[7]。２年前，一般向けの書籍を中心にしている出版社の編集の方と話をした時には，書名に「地理」とつけると売れないので，「地図」とつけた方がいいと言われたことがありました。地形・地理に関する市民向けの大規模な講座が開催されるなど，今までにはなかった現象も起きており，地理に対する社会の風当たりが変わったのではないかと感じています。これらのブームやニーズにうまく乗る形で，地理の本質や面白さを広めていければ，「地理は暗記科目」といったような地理に対する誤解もなくなり，地理自体も加速度的に広まっていくのではないかと思っています。そしてその加速を進めるために，微力ながら尽力したいと考えています。

1　「アウトリーチ」とは手を差し伸べる，という意味の英語ですが，科学者が学術界に閉じ籠らず,社会とつながることを意味します。科学コミュニケーションという単語も同じような意味で使われています。

2　『地理×女子＝新しいまちあるき』は雑誌のため書店での販売は終了していますが，出版元の古今書院では入手可能です（http://www.kokon.co.jp）。

3　地図グッズはお茶の水女子大学生協が販売主体のため，学外者の方はお茶の水女子大学生協への電話注文によって入手可能です（http://www.univcoop.jp/ocha/）。

4　この模様は日経 MJ 新聞（2016/10/31）と日経新聞（2016/11/26）に掲載されました。

5　月刊『地理』（古今書院）62 巻 1 号より，アウトリーチに関する連載記事を掲載中です。

6　http://ktgis.net/kjmapw/index.html

7　例えば，2016 年以降に出版されたタイトルに「地理」とつく一般向けの書籍は，宮路秀作 2017『経済は地理から学べ！』ダイヤモンド社，三城・関 2017『なぜ，地形と地理がわかると現代史がこんなに面白くなるのか（歴史新書）』洋泉社，伊藤彰芳 2016『東大のクールな地理』青春出版社などがあります。